

小学校の外国語科授業を想起する活動の実践 —「生徒にとっての」小中外国語科連携を目指して—

原 保之佳 教職基盤形成コース 教科授業力高度化プログラム

キーワード：英語教育 小中連携 想起

1. 研究の背景と目的

学部生時代、教育実習中の休み時間にある3人の中学校1年生と英語の授業についての話をした。教育実習は5月下旬に行われたため、授業内容は小学校の復習に近いものだった。しかし、「小学校の英語は楽しかったけど、中学校の英語は新しく覚えることも多いから大変。」という発言が出るなど、多くの生徒が英語の授業に対してネガティブな感情を抱いていることがわかった。筆者は、なぜ小学校時代にもすでに触れている内容の授業を受けた生徒が小学校と中学校の英語科を全く別のものかのような認識をしているのか疑問に思った。

学習指導要領(2017)や教科書等は小学校との接続を図っているため、それらを使用した授業は小中連携ができているはずである。しかし、中学校の内容を初めて経験しているかのような発言があることから、「生徒にとって」は連携できていないのではないかと感じた。この問題を解決するためには、授業内で小学校の内容を想起する機会を豊富に設け、小学校と連携していることに気づかせることが必要だと考えた。

そこで本研究の問いを「中学校の英語の授業において、小学校の英語の授業での学びを想起させ、小中連携を実感してもらうためには、どのような活動を行うことが効果的か」と設定した。

2. 方法

本研究では、想起活動を取り入れた授業実践を行い、想起活動が中学校の学びに向けてどのように生徒らに機能するか、その効果を3回の実践と省察を繰り返しながら明らかにした。生徒の発話や生徒との会話は指導案などに記録した。また、授業中の発言が恥ずかしくてできない生徒や、筆者と会話する時間がない生徒もいるため、毎回授業の最後に生徒が振り返りシートに記入する時間を設けた。

想起活動は、喜多・福井(2017)によって小学校外国語科で親しんだ活動や教材を中学校の授業で活用することは想起に効果的であると明らかになっている。よって、本実践にも想起活動に小学校時代使用された教科書などの教具を活用することにした。

3. 実践の考察

S 中学校では東京書籍の New Horizon を使用している。本抄録では、紙幅の関係上主に実践 3 を取り上げる。

表 1 実践の計画

	時期	教科書範囲	合計時限数
実践 1 回目	5 月	Unit 2 This, He, She, What, Who, How	5 時限
実践 2 回目	6 月	Unit 3 Where, When, How many, want to	6 時限
実践 3 回目	9 月	Unit 5 前置詞, 動名詞, 過去形	6 時限

3.1 実践前の構想

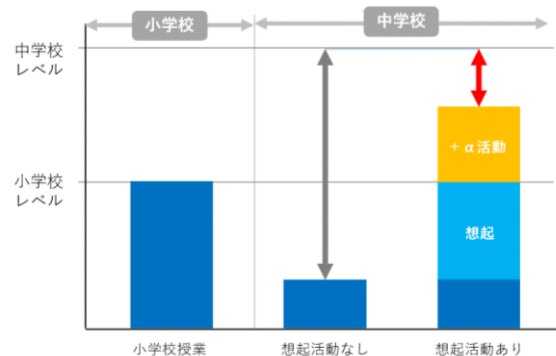
学習指導要領や大学院 1 年次の小学校授業参観から、中学校英語では小学校と比べて読むこと・書くことの高度化や、知識・技能の適切な活用が求められていることがわかった。筆者は、求められる技能や適切性の度合いという小学校と中学校の違いが、生徒たちにとってのハードルになると推測した。そこで、想起活動だけでは中学校の学びへのハードルを生徒らが乗り越えることは難しいと考え、中学校の学びの前にスモールステップとなるような活動が必要であると想定した。それを小学校の活動の難易度を 1 段階上げるものとして「+α 活動」と名付けた。想起活動と +α 活動によって中学校の学びに対して繋がりを感ずると共にハードルを下げることができると考えた (図 1 参照)。よって、実践では想起活動と +α 活動の効果と構成を追究することとした。

図 1 筆者が考えた想起活動と +α 活動の効果

3.2 実践 1 回目と 2 回目の成果と課題

3.2.1 実践 1 回目

実践 1 回目は、1 時限目に小学校の想起活動、2 時限目に +α 活動、3~4 時限目に中学校の指導を行い、5 時限目には Unit 2 のまとめを行った。その結果、想起そのものは小学校時代の教具を使うことにより、自身の表現や当時の活動内容を想起できていた。しかし、Unit のまとめに入る頃には、想起した内容を忘れてしまっている姿があったため、授業構成を再検討する必要があることがわかった。



しかし、Unit のまとめに入る頃には、想起した内容を忘れてしまっている姿があったため、授業構成を再検討する必要があることがわかった。

3.2.2 実践 2 回目

実践 2 回目は、1 時限目は想起活動、2~5 時限目は想起・+α 活動・中学校の学び、6 時限目は Unit のまとめを行った。想起内容を忘れないために、Unit 全体で想起活動を編成するのではなく、毎授業に導入し、中学校の学びへ繋がるように構成した。その結果、想起内容を忘れることなく、文法理解へと結びつけることができた。また、文法指導時に想起内容を活用する姿もみられた。しかし、+α 活動は、小学校の活動に軸を置いてしま

ったことで難易度が適切に調整できず、生徒にとってはスモールステップとは言えない活動だったのではないかと考える。なぜなら、+α活動の内容を活用できず、文法の理解に苦しむ姿が5, 6人ほどの生徒にみられたためである。よって、+α活動の難易度の調整という課題が残った。

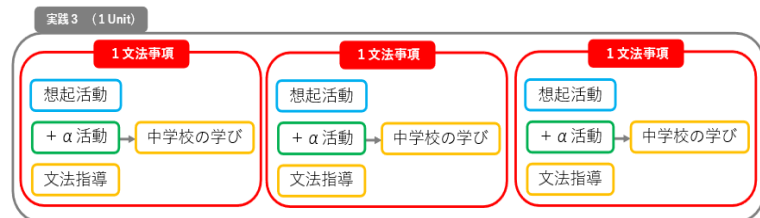
3.3 実践3回目

3.3.1 実践の様子

3回目の実践では、2回目の成果と課題から1文法事項を2授業に分け、1授業目に想起活動、+α活動、文法指導を行い、2授業目に中学校の学び(教科書を使用した指導)をすることにした(図2参照)。

図2 実践3回目の授業構成

想起時間に小学校時代に使用したアニメを見せた。すると「夏休みの思い出の話だ!」「絵を描いた記憶があるな。」「夏休みの思い出を話したな。」と声上がり、小学校時代の経験を想起する姿があった。



+α活動は、小中学校の違いの1つである音認識と文字認識の扱いから、カルタという方法を取り、音認識から文字認識にかけてスモールステップが踏めるよう次のように構成した(表2参照)。

表2 +α活動の構成

	読み札	取り札
1回目(計7問)	過去形が使われた文の音声	イラスト
2回目(計7問)	過去形が使われた文の音声	文
3回目(計5問)	過去形が使われた文の提示	イラスト

1回目は、札を取る音が音声の途中でも聞こえ、「簡単すぎる」とF生は話していた。しかし、問題中盤に不規則動詞の音声を流すと札を取る音が音声終了後に聞こえ、「これであってるかな?」とグループで確認する姿があった。2回目は、1問目から動詞が聞こえた時点で札を取る音が聞こえた。中盤に生徒らは「さっきより難しくなっている!」と話していた。筆者が「形が変わる動詞はどうか?」と聞くとG生は「1回目は迷って他の単語で札を取っていたけど、今は形が変わっても(不規則動詞でも)どこか過去形じゃない動詞(動詞の原形)の形と似ているから取れそう。」と話した。3回目は、1問目からF生が「さっきよりレベルが上がっている…。よく読めば取れそうだけど、時間がかかるな。」と話した。3回目は1, 2回目と比べて1問ごとに時間がかかるがグループ内で偏りなく札を取っている姿があった。また、文を提示した瞬間に、じっと文字を見つめたり、文とイラスト

を相互に見たりする姿があった。

3.3.2 省察

実践2のように、導入時に想起活動を行ったことで、想起内容を文法理解に活かすことができていた。また、+ α 活動は1回目の様子から、簡単すぎるというような発言やクラスの雰囲気から、取り札を正確にとることよりも、素早く札を取ることに集中しているように見え、カルタのゲーム性を楽しんでいるように感じた。一方で、2回目の前半は過去形に注目しているというよりも過去形以外の単語から文の意味を推測して札を取っている様子があった。よってこの段階では、完全に文字を認識することに慣れていなかったと考える。後半になるにつれて札を取る速さが速くなったが、不規則動詞に関してはまだ不慣れな様子があった。札を素早く取ることよりも、正確に札を取るために読み札の文章の内容を確認することに集中しているように見えた。3回目では初めて過去形を読むことを行ったため、前半は特に時間がかかった。文章とイラストを相互に確認する姿から、文章の意味を理解しようとしていたと推測する。問題数を重ねていくにつれて札を取るのが速くなったことから文字認識に慣れ始めたと考えた。よって、本時の+ α 活動は、音認識から文字認識に向けて生徒にとっての段階を踏んだ+ α になっていると捉えた。

想起内容を活用した文法指導を通して、+ α 活動がスモールステップとして機能し、中学校の学びに繋げることができたのではないかと考えた。

3.3.3 まとめ

1 授業で想起、+ α 活動、中学校の学びを行うことで気づきを活用する流れを作ることができたと考える。また、想起活動だけでは中学校の学びへと結びつけることはできず、+ α 活動とセットで行わなくてはならないと3回の実践を通して痛感した。特に+ α 活動は、難易度の調整や生徒の経験を活用するなど工夫を施さなければスモールステップとして機能しないように感じる。

4. 今後の課題

今回は小中連携を軸として中学校1年生を中心に研究をしたが、中学校2,3年生の授業でも前年度の学びを想起して活用することは効果的か研究してみたい。また、+ α 活動後に行う中学校で求められるレベルに達するための言語活動をより深く考えていきたい。

文 献

- 喜多容子・福井英子. (2017). 「小中の円滑な接続を図るために—カリキュラムと指導の工夫—」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』第8号, 25 - 34.
- 文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』